
サクと乗車駅

策士 溺愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクと乗車駅

【Zコード】

Z5255BA

【作者名】

策士 濁愛

【あらすじ】

サクとナギという登場人物が、一つの村を訪れたときのはなし。
そこは”100”人の村だつた。
サクは何を感じ、何を思うのか。
ナギは何を思い、何を感じ取るのか。
一人の記憶の1ページ。

大粒の八重桜の花びらが清涼感のある生暖かい風に、まるで波乗りをしているかのように宙を舞い、辺り一面はピンク色と濃淡様々な緑黄色のグラデーション、その色彩の中に合掌造りの集落がバランスよく整列している。そこは理想とは違った想像通りの風光明媚な落村だった。

田舎の駅は、大抵無人であるがやはりここもそうだった。犬の小屋を、でかくしたような簡素な造りを抜けると、すぐホームに行き着いた。

ホームは10メートルくらいで、アイスクリームと書いてありそうな青色が少し剥げたベンチが置いてあった。目の前には向いのホームはない。当然線路も1レールだけで、他に利用者はいなかった。

「IJの村はどうだった？ 考え深かったと思つけど」

その声は男声とも女声とも違う不純物の無く、透き通った水晶からうまれるような清涼な声であつた。また、客觀的、永世中立的な声でもあつた。

「うーん、桜つてさ人間みたいだよね。そう思つた」

少年より少年らしさその声はそつなかつた。

サラサラと肩くらいまである鳥羽色の髪を揺らし、そこから対照的に白い肌を覗かせ一匹の動物らしい物体を見つめている。

白い肌は、どこまでも華奢な身体と、どこまでも精悍な顔を優しく包んでいた。

「それだけ？ それに村の感想じゃないじゃない」

少し呆れた様子で動物らしい物体はぼやいた。
どうやらあのすばらしい声は、この動物らしい物体から発せられているらしい。

「ナギってさ猫みたいなのに全然クールじゃないよね。 そんなにぼくにかまつて欲しいの？」

「それもつい二回くらい答えたよ。 答えは、いいえ結構ですよ。 サクの変化について記録するのがわたしの使命だから。 それにサクが決めたことじゃないか」

「やうだよ。 その方が楽しいかなって思つたから。 それに猫つて可愛いしや」

サクという人物と、ナギという見た目が猫の会話を一段落させるようになつた。

モクモクと黒い煙を上げ、車輪とレールの金属音と共に無骨な黒い塊は一人の前で止つた。

そして汽車の中から車掌らしき人物が降りてきた。

「いやーこんな駅に止まるのはほんと久々だなー。 10年いや20年ぶりかな」

車掌は万歳のようなポーズをし身体を伸ばしていた。

「あのー。」れバスポート」

サクはせつ言いながら、自分の顔写真がついたパスポートを車掌に差し出した。

「おーすまんすまん」

車掌は差し出されたバスポートを、確認し虚偽がないかチェックし始めた。

この人の癖なのか良くなにする声出し確認をしていた。

「えーと、名前と年齢と有効期限と、あと写真か」

そう独り言のよつこつぶやくと車掌の田が止まった。
なにか不思議な、信じがたいものを見るよう。

「」の写真ほんとに君かい?」

田を丸くして写真とサクの顔を交互に見つめながら車掌は言つた。

「わうんですけど、なにか問題でも?」

サクは相変わらずそつけなく答えた。

「あーいや、写真の虚偽とかって言つわけじゃないんだよ。長年写真を確認してきたけど、こんなに写真映えする人見たことなかつたからね」

「はー」

サクは少し戸惑った様子だった。

「[写真映えつて言葉はちょっと失礼だったかな。元々美人さんだけどこの[写真の君は生き生きしてるというか。見てるこっちが元気になつてくるような、そういうことだよ」

「はー」

サクは少し困った様子だった。

「あーっ長話して悪かったね。そー乗つて乗つて」

そう謝るよううに車掌に言われるとそそくさとサクは汽車に乗り込んだ。

汽車の中は外装の無骨な造形ひっくり返したような様式で、内装は白と黒の市松模様をベースとし多彩な装飾が施されていた。

照明は小型のシャンデリアが使われていて、光源を乱反射させ魅力的に見せるためガラスが複雑に配置されているタイプであった。座席の配置は普通のボックス席タイプであったが、乗客への衝撃を和らげるクッションはブラックドレッドのヴェルヴェット生地が使用されており、プードルの毛のよううにフカフカしていた。ナギはクッションの上に飛び乗りると、ショーンショーンした様子でサクに話しかけた。

「うわー。すごい豪華な内装だね。きっと前の村での「豪華だね」

「確かに不自然なくらい豪華だよね。窓にも赤いカーテンが着いているし装飾一つ一つが細かく造られてる」

「でも私の趣味ではないな。剣とか骸骨とか、なんかオカルトっぽい」

「やつこつわけじやないよ。じつこつ『シックみたいな』『ザイン』って宗教的な影響が強いんだよ」

サクの表情は、心なしか緩んでいた。それをからかいつつナギは切り出した。

「サクって本当によくしゃべるんだねー。やつきの車掌さんみたい」

「ナギが話しかけたからじゃないか。これでもぼくは道を尋ねられたら、それこそ丁寧に説明してあげる質なんだよ」

「本当にやつき美人さんだなんて言われて困つてたじやないか。あつもしかして照れてたの?」

ナギの上顎と立派なヒゲは上向きにカールしていた。サクはムスッとしたように顔を横に反らした。

「ぼくの中の車掌さんのイメージと違つててびっくりしてただけだよ。普通はもつとクールだと思つてたから」

「ふーん。わたしもサクはもつとクールだと思つてたけどね」

「もーーい。疲れたから少し寝る」

サクは普段通りそっけなくそう言つと、横になつて小さな寝息を立て始めた。

それを見つめるナギの顔は少し嬉しそうに見えた。

その後ナギも丸くなり小さな寝息を立て始めた。

一人を乗せたまま汽車はせっせと走り続けた。黒い煙をモクモクと上げながら、いくつものトンネルを超えて、樹海を超えた。それを何度も繰り返しているとだいぶ開けた場所に出た。そこには人の臍当たりの背丈の雑草がイモ洗い状態になつた畠だつたらしい敷地や、廃屋にたつた木造建築の家屋がそこらじゅうに放置されていた。

そこは一言で言えば廃村であった。

「サク起きて」

ナギは爪を立てないよにピンク色の肉球をサクのほっぺにちゅこんと乗せた。

すると、サクは薄目を開けてなにかつぶやいた。

「お腹空いた・・・」

「もうすぐ次の駅に着くみたいだから降りる準備して。そこで食事もしようよ」

サクはしじうがなさそうに、掛けていた上着を羽織り、脱いでいた編み上げのブーツを履いた。

ナギは窓ガラスに映る自分を確認しながら顔の毛波を整えたり、首につけている白いリボンに汚れがないか入念にチェックしている。その様子を見たサクは、

「猫なのに洋服着てるのって変わってるよね。それもタキシードって」

「濁点が抜けてるよ。猫だつて旅行する時くらい身だしなみを気にするんだよ。サクは人間なににお洒落つて言葉を知らないのかい？」

「ぼくのどこがお洒落じゃないんだい？」

「まあなんで着物と袴？次になんでその上から黒いコート羽織つてるの？」

「分つてないのはナギのほうだね。着物と袴つて衣類はすごい歴史のあるものなんだよ。文化だよ文化」

「それは知ってるけどその場その場に合わせた衣類を着用するのもお洒落の内なんだよ。サクは何かの式に出席でもするのかい？」

サクはナギの顔を見て目を細めた。

ナギは一瞬でサクの言わんとすることが分かった。
それくらい得意げな表情だった。

「ぼくの着てるのは礼服じゃないんだよ。上は浴衣つて言われてる和服だし袴は武道袴だし」

「はー。でもその上からトレーナーじゃね」

「和と洋の融 . . .」

キキーッ。

二人の会話を遮るように汽車のブレーキによる甲高い金属音が鳴つた。

「着いたようだね。さあ降りよう」

ナギは座席から飛び降りるとトクトコと出口に向かった。

「サクー。はやくー」

サクはせつ急かされると叫足で出口まで行った。

「いいあだ名だね」

最後までおしゃべりな車掌だった。

一人はホームに降りると辺り一面を見まわした。

駅とホームは、前のと左程変わらず言葉を選ばなければ錆びれいるという印象だった。

向いのホームも無く当然無人駅で、他に乗客もいなかつた。

「Hクソアだつて。この駅の名前かな」

サクはナギに質問した。

ナギはホームにたつている看板を手を凝らして見てみた。

「奥へ見るといつずら横に駅つて書いてあるね」

「どうこつ意味なんだろ」

「さあ。町に行けば分かるかもね」

一人は駅を出て駅前広場に出た。駅前広場には秤を見つめている老若男女の像が、噴水の真ん中に水しぶきを浴びながら立っていた。広場から見える景色は、錆びれた駅とは打って変わって活気溢れる商店街であった。

いかにもここから商店街です、というようなブルラボンス通りと書かれたアーチ状のゲートがあった。

通りには軒並み店が営業していて、それに見合つ消費者でじつた返していた。

「すごい人だね。どこかの闇市場みたいだよ

あっけにとられながら一人は、通りを進んでいくと一軒のレストランがあった。

外見はいかにも洋風といった、食事というよりランチといった店だった。

「そういえばお腹空いてた

サクは、そう言つと吸い込まれるようにレストランの中に消えていった。

それを追いかけてナギも消えていった。

「こきなり店に入つていかないでよ

「ナギもお腹空いてるでしょ？それにきみが好きそうな洋風なレストランじゃないか

「まー遠からず近からず」と「だけ」も

一人が問答してくると店員がやつてきた。

「いらっしゃいませ。一名様でいらっしゃいますか？」

サクはうなずいた。

「かしこまつました。お席へ」案内いたします」

二人は言われるまま案内された席に座つた。
そして、サクは肉料理を注文しナギは魚料理を注文した。
空腹だつたためか二人はあつという間に完食してしまつた。
食後のコーヒーも飲み干して会計を済まし店を出た。

「おこしかつたね」

ナギは満足そうにサクに話しかけた。

「やうだね。こんなにおいしい料理食べたの久々かも。それに内装
もちょっと変わつてた」

「うふ。なんか教会を改装したような造りだつたね」

「本当の教会だつたりしてね」

レストランの感想を言いながら歩いていふと、小さなショーウィンドウの前でサクは足を止めた。

そこはアクセサリー専門店だつた。

店の看板には、ブラックレター書体でROYAL EVOLUSIONと彫刻がしてあった。

サクはショーウィンドウに飾られている、星型に宝石の埋まつたピンクゴールドのシルバーに、細かい造形の王冠がかぶさつているアクセサリーを見つめていた。

「サクってアクセサリーなんでものに興味あつたの？」

ナギは皮肉混じりに言った。

「ううん。興味無かつたけどこの店のアクセサリーには興味がそそられる」

「ふーん、それはそれは」

サクは、また吸い込まれるように店の中に消えていった。それを追いかけてナギも吸い込まれるように消えていった。

店の中には、リングやネックレス、宝石の類が飾めき合つていた。壁にはどうやら何かの賞を取つたであろう賞状が数多く飾られていた。

しかし寄はいなかつた。

「あの」

サクは、椅子に腰を掛けっていた職人兼店員らしい年配の人物に話しかけた。

その人物はサクの顔を見ながら、

「なにかお気に入りしたものは？」

「あつはい。ショーウィンドウに飾つてあつた王冠と星の
あー。あれね。あれはねうちの今の商品の中で一番古いデザイン
なんだよ。うちが昔の王室にアクセサリーを提供してたときからあ
るんだよ」

「セウなんですか」

「でも今の風潮には合わないデザインなのかね。全く人気がないん
だよ。あれの良さが分かる人にまた会えてわしは嬉しいよ」

老人はニンマリ笑うと重い腰を上げショーウィンドウに向かつた。
老人は三つのカギを外すと、サクのお皿でのアクセサリーを取り
出してサクに手渡した。

「これは君に差し上げるよ」

「えついいや。でも」

「いいんだよ。少し年寄りの世間話を聞いてくれるかい？」

サクは少し考えた後、

「はい。聞かせてください」

老人はまたニンマリした。

「「」の店も今の通り客足はパツタリでね。でもわしの若い頃はとて
もハンドメイドを続けられないくらい流行っていたんだよ」

「今も素敵だと思います」

「ありがとうございます。もともとは王室「」用達の名店でね、ほら壁に掛つて
るだろ?」

「たくさん賞を取られたんですね。王室とは?」

「あー。「」の町はね昔は国家だつたんだよ。もちろん王政のね。よ
くある話だろ?王政の国なんてそう上手くいかない、「」もそうだ
つたんだよ」

「そりだつたんですか。でもどうして町に?」

「王政が終わりを告げた時に、これからこの国の方針を国民全員で話
し合つたんだ。すると一つの案が出てきたんだよ。

国みたいに大勢の人がいるから統治する人が必要になる。なら規
模を小さくして一つの町なり村にすれば一人一人の意見が尊重され、
足並みも揃えられるんじゃないかつてね。

これもよくある話さ」

老人はサラリとした口調だつた。

「ふむ、それでどうなつたんですか?」

「いくらかの会議の後、「」の案を推進する「」に決定されたんだよ。
それで国家ではなく町にして、そこの住民は“100”人になると
いうことと決まつたんだよ。」

「”100”人ですか・・・？」

「みんなから信用されていた、ある優秀な学者達が一番効率がいい人数を求めた結果”100”人だつたんだ。

もちろん次の論点はどう”100”人を決めるか、それと溢れた住民についてだつた。

なに簡単な話だよ。選民思想というのを知つていいかい？」

「はい、一応」

「この土地には主に、ベイル民族とスピング民族という人種と他の少数の人種がいたんだ。

当時は一般的に、ベイト民族の方が優れている人種とされていてね。その中から”100”人を選ぶことになつたんだよ。

しかし、まあ、当然反対の声が多くてね。その解決策が、両民族の中で優秀な人材が能力測定試験をつくつて、能力の差を露呈させて選民することになつたんだよ。

実際試験をやつてみると、予想されていたような能力差は無かつたんだがね。

”100”位以内に入れなかつた人は、この土地を追い出されたり逆らつた人は殺された。

当然その選ばれた人の中には、優秀な元軍部の人もいたし優秀な科學者もいたからね」

「ではおじいさんも優秀だつたんですね」

「はつはつは。やはり初期の選民は平等じゃなくてね。選ばれた人は、大半が王政の頃の上層部の人でね」

その後、老人は壁に飾つてある賞状に目をやつた。

「しかし時がたつにつれて、町の外から優秀な人が入ってきて今は王政の頃の人間はわしだけになつたよ。

能力試験も何度も何度も改正されて、その度により高度な能力が必要になつたんだよ。

わしも死ぬ氣で頑張つたがね・・・今のわしは”100”位なんだよ。寄る歳には勝てんよ。

次の選民査定が来たら確実にわしはもつだめだよ。この店も閉めなきゃいけなくなる。

君が最後のお客さん・・・もらつてくれかね」

老人の表情は、アクセサリーのようだった。

「は・・・はい、それなら」

老人はまたニンマリ笑つてみせた。

ナギと店を出たサクの胸には星と王冠が眩く輝いていた。

ピーンポーンパーンポーン。

効果音の後にアナウンスが入つた。

「本日午後五時より選民査定を行います。住民のみなさんは駅前広場にお集りください。なお見学なさる方は迅速な査定を行つためご協力をお願いします」

アナウンスは三回繰り返された後、同じ効果音がなりپチつと回線が切れた音がした。

「サク、見学していいみたいだよ

「みたいだね」

二人は駅前広場に行くと、広場を囲むように即席の柵が設置されていた。

どうやらその外側は見学者で、内側は住民のようだった。

広場の内側には、机と椅子が置いてあり住民が席に着席していた。

「あれ？」

サクは不思議そうにそう言つた。

「本日の査定人数は101人つて書いてあるよ」

それを聞いていた見学者の一人が得意げに話しかけてきた。

「この町の住人になりたいという人が申請してきたら能力試験をやるんだよ。今日は101人だけ多い時は150人以上の時もあるんだよ。

今日は誰が脱落するんだろうね」

見学者は楽しそうだった。

「あつ」

ナギはなにかを見つけた。

「さつきのおじいさんがいるよ」

「本當だ」

「サクとじてはおじいさんに残つてもういたいのかな？」

「なんでだい？」

「形見を押しつけられたみたいで嫌じやないかい？」

サクの返答を待たずしてアナウンスが入った。

「これより選民査定を行いますので見学者のみなさんはお静かにお願いします」

広場はシーンと静寂に包まれた。

住民の一人一人が、机に置かれたヘルメットのようなものをかぶりはじめた。

そのヘルメットにはケーブルらしいものが出ており、101本のケーブルは一つの機械に繋がっていた。

十分程の静寂の後、住民は一斉にヘルメットを外し、足早に噴水前に置いてある電光掲示板の前に集まつた。

掲示板には測定中の文字が三度点滅した後、順位と名前が表示された。

住民と見学者は、皆掲示板の文字に釘付けになつた。

「見ても分からぬよね」

「そうだね」

またアナウンスが入つた。

「今回の査定で”100”位以内に入れなかつたのは、前”100”位のジャスティン・ハーツ氏です。

大変喜ばしい事を祝しまして、ただいまより前年通り住民による簡単な祝賀会を催します。

このまま見学することもできますので、お時間がある方は是非存分にわが町を見学していっていただければ幸いです」

ほとんどの見学者は引き続き見学をするようだつた。

「わたし達も見学する?」

「うん。 あのおじいさんはこれからどうするのかな」

「サクあれ見て」

ナギが視線を送つた先には、アクセサリー屋のおじいさんが壇上に立つていた。

「わしは、王政の頃からこの国を見てきましたし共につくつてきました。

そしてこのすばらしい選民査定という制度を生み出し、より高貴なものにと努力してきました。

まさにこの町の住民は、他の土地の大國にも勝るとも劣らない全知全能でありますからも、人格者集団となりました。

残念ながら今回わしは、適合者には成り得ませんでしたが悲観はしていません。

わしは先人に、わし達がつくつた町はすばらしいこと、清く正しい町作りだつたと伝えます。

みなさんもわが町を誇りに思い、精進していくことを忘れますまいよう、いつも見守つてるのでどうかこの町をよろしくお願ひ申し

上げます

おじいさんの演説にも似た、熱い主張が終わると住民が歓声を上げた。

それに続いて大半の見学者も歓声を上げた。

その後、おじいさんは商店街の通りに数人に引連られて消えていった。

住人と、見学者は熱が冷めきらないらしくしばらく談笑などをしていた。

しばらくすると、商店街通りからおじいさんと消えていった人達が戻ってきた。

カラカラとなにやら配膳車らしい物を引いていたが、そこにおじいさんの姿はなかつた。

住人が査定の際座つていた椅子に着席すると、配膳車から肉料理のようなものが住人全員に配膳されていった。

住人は箸を取ると皆一斉に、そして同時に一切れの肉を口に運んだ。その食事のよだな光景を、見学者達は目を丸くして見ていた。目に焼き付けるように。

しばらくすると見学者は帰つていき、住民達も机や椅子等をそそぐさと片付けた後、商店街通りに一斉に消えていった。

二、三分後には、広場にいるのはサクとナギだけになつていた。

「ねーナギ。おじいさんつてさ・・・」

「だろーね。わたし一応猫だからね」

ナギは、血慢げにフンと鼻を鳴らしてみせた。

「 . . . あつ」

サクは何か思い出したように声をあげた。
するとナギは、

「大丈夫だよ。牛肉だつた」

「はー . . . よかつた」

サクは安堵の言葉を漏らすと、おもむろに胸にかかつたネックレスをまじまじと見出した。
ネックレスの王冠の裏には、”100”という数字が刻印されていた。

「ナギ?なんか書いてある」

「つーん、ロットナンバーじゃない?」

「あー、じゃあ”100”番田つてことだね」

一人は駅の方に体を向けた。

「行こうか」

「そうだね」

二人は駅に向かつて歩き出した。

「あつそうわう。」の村の感想は？」

「「へーん、」のネットクレスの宝石ってなんて言うのかな？」

「サクってば、また質問の意図とズレてないかい」

ナギはいつものように少し呆れた様子だった。
そしてサクの胸元に手をやつた。

「えーと、トルマリンじゃないかな

「トルマリン？」

「希少価値はそんなに高くないけど、石言葉は希望だったかな」

「へー。希望かー。確かに、少年からイメージを取り出して蒸留して
たような藍色をしているね」

サクはいつも通りそつけなくそつ答えた。

二人を見送るような旋律で、

”100”人と”友達”から連想される歌

どこからか楽しそうな子供の声が寂しく寂しく響いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5255ba/>

サクと乗車駅

2012年1月14日16時52分発行